

ラグビーフットボールの特質に関する研究 (Ⅱ)

—美意識—

池田 一徳*, 三浦 健*

A Study on the Characteristics of Rugby Football

— In Consciousness of Beauty —

Kazunori IKEDA* and Ken MIURA*

Abstract

There are many rugby football players and fans that have consciousness of beauty that rugby football is beauty of man and the tackle is a most impressive scene in the rugby football game, and so on.

Then the purpose of this study makes sure of a better coaching idea of rugby football than before by clarifying the consciousness of beauty which Japanese rugby football players and fans have.

The method is the following two points;

- 1, First was referring to the earlier study and literature on these subjects.
- 2, Second was analyzing a questionnaire on rugby football's image.

KEY WORDS : *Rugby football, Consciousness of Beauty*

はじめに

ラグビーは男の美学である¹⁾²⁾³⁾, タックルはラグビーの華である⁴⁾⁵⁾等の美意識を持つラグーマンやファンが多い。

突進してくる相手を捨身のタックルで倒すと、そこにフォワードが猛烈な勢いで突っ込み、ボールの争奪を行う。そして密集からボールが出るとスクラム・ハーフの素早いパスでボールは矢のようにバック・ラインを流れて行く。またスクラムやラインアウトでは一瞬息が止まるかのような緊迫感が漲る。力強く、素早く、柔軟に、攻と防とが瞬時に入れ変わる。動と静、離合と集散が織り

なす美しさは、まさに男性的美しさである。

しかし、ここでいう男の美学とは、このような外面的な美しさだけでなく、もっと内面的な、人間性に関わる、ラグビー精神に根ざした美意識を指しているものと思われる。

したがって本研究は、ラグビー精神との関連において日本のラグーマンやファンが抱いている美意識について、これらの問題に関連する先行研究及び文献とともに、ラグビーのイメージに関するアンケート調査の分析に基づき、ラグビーのもつ美意識を明らかにし、ラグビーの指導理念をより確固たるものにすることを目的とした。

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

美意識について

美とは、美意識とは、美学とは何かについて哲学辞典をひもといても難しくよく分からない。

そこで、わりきって国語辞典⁶⁾を開いて見ると、

1. “美”は美しいこと、よいこと、ほめる価値のあること。

2. “美意識”は美を美として感じ取る感覚。

3. “美学”は自然・芸術における種々の美を通して美の本質・原理などを研究する学問。

と書いてある。簡単に書いてあるので少し分かったような気がする。

吉岡⁷⁾は、美は人間にとっての価値の一種であり、美学を人間とは何かと問う人間学の一環として位置づけている。ところで、人間にとっての価値とは何であろうか。普通一般には善・真・美・聖などが挙げられている。人間は生来善くあろうと願うものだと考える。そして善くなろうとする魂(精神)の中に真(誠)、美しいこと、聖(宗教)という価値を見い出して行くのではないだろうか。

袴田は善くあろうとする行動、即ち自己目的の非功利的な精神態度を、「生き方の美学」⁸⁾と呼んでいる。

筆者はラグビーが好きで、ラグビーを愛している。それは人間性を高めてくれる美しさがあるからだと考える。

中井⁹⁾は、美しいことを考え、たずねていくことを美学と言っている。

そこで男の美学とは、信じるものを持って、ただひたすらに、使命感に燃え、誠実に、強く、たくましく、潔くありたいと求め考える“こころ意気”と考える。

山本は、「美はなによりもわれわれの感動において現れる。美の感動はわれわれの人間的な自己充足の瞬間としてある。美の充足はまさにわれわれの生や存在の深い真実さの体験である。」¹⁰⁾と述べ、美との出会いや体験を問題にしている。

そして、「すべての存在者の根源は、自然の心理、自然の法則に従うことである。この法則は(道)とよばれ、これを実現し輝かすことはすべての存

在者のモラルである。」¹¹⁾と述べている。

樋口は、スポーツにおける美的価値について、「本質的に遊戯性に立脚するスポーツが、その本質性を最も充実して発現するのは、美的価値においてである。人をスポーツにかりたてるまさに根源的な力は、気晴らしとか健康とか名誉とか金銭とかの日常的次元の価値ではなく、それらを超越した垂直的な高みに輝ける美的価値である。」¹²⁾と述べている。樋口の日常的次元の価値を超えた美的価値や、山本の道の精神に流れる美意識、袴田の生き方の美学などが、筆者の求めているラグビーの美意識ではないかと考える。

以上のことから筆者は、「美意識」を諸々の事物への出会いや、体験の中で、「美しいものであることを見い出し、判断し、理解する感覚である」と定義し、以下ラグビーの美意識を、ラグビーの特質(ラグビー精神)を根底にして分析して行くことにする。

研究方法

スポーツの美学や美意識については、いくつかの先行研究が行われている。しかしラグビーに関して、特に美意識や美学を取り上げた研究は行われていない。したがって本研究は、文献とアンケート調査により、ラグビーの美意識を明らかにすることにした。

調 査

1. 対象

本調査では、まず競技成績において、全国大会に出場したチーム(全国レベル)の内、高校3チーム、大学4チーム、社会人7チームのレギュラーメンバー各21名の計294名を、ラグビー経験のある、現役の選手(以後現役選手)の対象とした。なお、社会人チームの内2チームについては、高校・大学時代に全国レベルの大会を経験している選手が含まれている。

これに対し、高校(2ヶ所)、大学、社会人(2ヶ所)の各層から、ラグビー未経験者の男性各50名の計250名を、ラグビー未経験者(以後未経験者)の対象とした。

また、往年全国レベルの大会で活躍し、現在は一線を離れた者同士で結成している3チームのレギュラーメンバー各21名の計63名を、ラグビー経験のある、OBの選手（以後OB選手）の対象とした。

なお、調査に協力していただいたチーム名及び所属名を表1に記す。

表1 調査協力 チーム

現役選手	高 校	鹿児島実業高校 熊本高校 日川高校
	大 学	大東文化大学 筑波大学 明治大学 早稲田大学
	社会人	近鉄 神戸製鋼 三洋電機 東芝府中 ニコニコ堂 三菱自工京都 三菱重工長崎
未経験者	高 校	鹿児島実業高校生 佐世保南高校生
	大 学	鹿屋体育大学生
	社会人	佐世保南高校教員 ニコニコ堂
OB選手		不惑クラブ 迷惑クラブ 惑惑クラブ

2. 手順

本調査は、独自のアンケート用紙を用い、各チーム、所属の代表者に連絡を取り、本研究の趣旨を説明した上で調査への協力を了承していただいた後、郵送法並びに手渡し法により、調査依頼状及びアンケート用紙、返信用封筒を同封し、1993年11月1日から1994年3月21日にかけて、配布及び回収を行った。

配布数は607で、そのうち有効回答数は398、回収率は65.6%であった。現役選手、未経験者、OB選手別の内訳は表2に示す。

表2 調査対象別のサンプルの回収率

調査対象名	配 布 数	有効回答数	回 収 率
現役選手	294	234	79.6%
未経験者	250	143	57.2%
OB選手	63	21	33.3%

3. 内容

本研究での調査項目は、以下の5要因に関する計11項目である。

- ①ラグビーの特性を表すイメージ
 - ・男らしさ ・危険 ・かっこよさ
 - ・たくましさ ・厳しさ ・きつさ
- ②ラグビーにおけるプレイの特性
 - ・タックル ・トライ
- ③ラグーマンとしての態度
 - ・ガッツポーズ
- ④ラグビー精神とショーアップ
- ⑤男の美学

4. 分析方法

調査内容の①ラグビーの特性を表すイメージに関する6項目については、＜そう思う＞、＜どちらでもない＞、＜そう思わない＞の3段階評価により分析を行った。また、②～⑤については、＜はい＞、＜いいえ＞の2段階評価により分析を行った。

分析の手順は、まずラグビーの経験別の比較として、年齢層の近い、現役選手と未経験者による比較を行った（表3）。次にラグビー経験者における年代別の比較として、高度なラグビー経験を持つ、現役選手とOB選手とを合わせて比較を行った（表4）。

本研究のデータ分析は、SL-MICRO 統計パッケージを用いて、属性である、経験別、経験者の年代別を、調査内容の計11項目とで、それぞれクロス集計を行い、グループ別比率の差の検定には χ^2 検定による比較を行った。

5. 結果及び考察

①ラグビーの特性を表すイメージ

ラグビーのイメージで第1に挙げられるのは“男らしさ”¹³⁾である。タックルなどのコンタクトプレーはプレイヤーにとって“恐怖”¹⁴⁾註1)であり、したがって勇気を必要とする。しかし、技術と体力が伴わなければ危険である。それゆえにきつい、厳しい鍛錬と心構えが要求される。男の本質は家

表3 ラグビーの経験者（現役選手）と未経験者とのラグビーに関する意識の比較 上段=N 下段=%

項目	カテゴリー	ラグビーの現役選手と未経験者 N=377			項目	カテゴリー	ラグビーの現役選手と未経験者 N=377		
		現役選手 N=234	未経験者 N=143	χ^2 検定			現役選手 N=234	未経験者 N=143	χ^2 検定
ラグビーは男らしい	そう思う	228 (97.4)	133 (93.0)	N. S.	ラグビーは危険	そう思う	208 (88.9)	132 (92.3)	N. S.
	どちらでもない	6 (2.6)	4 (2.8)	d f = 1		どちらでもない	17 (7.3)	6 (4.2)	d f = 2
	そう思わない	0 (0.0)	5 (3.5)	χ^2 値		そう思わない	9 (3.8)	5 (3.5)	χ^2 値
	無回答	0 (0.0)	1 (0.7)	=3.286		無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	=1.515
ラグビーはカッコいい	そう思う	170 (72.7)	87 (60.8)	** P<.01	ラグビーはたくましい	そう思う	218 (93.2)	133 (93.0)	** P<.01
	どちらでもない	51 (21.8)	32 (22.4)	d f = 2		どちらでもない	14 (6.0)	1 (0.7)	d f = 2
	そう思わない	12 (5.1)	23 (16.1)	χ^2 値		そう思わない	1 (0.4)	8 (5.6)	χ^2 値
	無回答	1 (0.4)	1 (0.7)	=13.313		無回答	1 (0.4)	1 (0.7)	=16.164
ラグビーは厳しい	そう思う	189 (80.8)	126 (88.1)	N. S.	ラグビーはきつい	そう思う	204 (87.2)	134 (93.7)	* P<.05
	どちらでもない	38 (16.2)	12 (8.4)	d f = 2		どちらでもない	26 (11.1)	4 (2.8)	d f = 2
	そう思わない	7 (3.0)	5 (3.5)	χ^2 値		そう思わない	4 (1.7)	2 (1.4)	χ^2 値
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	=4.766		無回答	0 (0.0)	1 (0.7)	=8.637
ラグビーの醍醐味は	はい	185 (79.1)	90 (62.9)	** P<.01	ラグビーの面白さは	はい	151 (64.5)	123 (86.0)	** P<.01
	いいえ	48 (20.5)	53 (37.1)	d f = 1		いいえ	82 (35.1)	19 (13.3)	d f = 1
	無回答	1 (0.4)	0 (0.0)	χ^2 値 =12.224		無回答	1 (0.4)	1 (0.7)	χ^2 値 =21.332
トライ後のガッツポーズは	はい	41 (17.5)	16 (11.2)	N. S.	ラグビーは男の美学である	はい	131 (56.0)	64 (44.8)	* P<.05
	いいえ	193 (82.5)	125 (87.4)	d f = 1		いいえ	102 (43.6)	76 (53.1)	d f = 1
	無回答	0 (0.0)	2 (1.4)	χ^2 値 =2.602		無回答	1 (0.4)	3 (2.1)	χ^2 値 =3.871
ラグビーもサッカーやバレーと比べて	はい	100 (42.7)	56 (39.2)	N. S.	*... P<.05 **... P<.01				
	いいえ	134 (57.3)	84 (58.7)	d f = 1					
	無回答	0 (0.0)	3 (2.1)	χ^2 値 =0.270					

表4 ラグビーの経験者(現役選手とOB選手)における年齢別のラグビーに関しての意識の比較

上段 = N
下段 = %

項目	カテゴリー	現役選手 & OB選手 N = 255			χ^2 検 定	項目	カテゴリー	現役選手 & OB選手 N = 255			χ^2 検 定
		10 & 20代 N = 216	30 & 40代 N = 18	50代以上 N = 21				10 & 20代 N = 216	30 & 40代 N = 18	50代以上 N = 21	
ラグビーは男らしい	そ う 思 う	210 (97.2)	18 (100.0)	18 (85.7)		ラグビーは危険	そ う 思 う	191 (88.4)	17 (94.4)	12 (57.1)	N.S. df = 2 χ^2 値 = 5.459
	どちらでもない	6 (2.8)	0 (0.0)	0 (0.0)			どちらでもない	16 (7.4)	1 (5.6)	3 (14.3)	
	そう思わない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)			そう思わない	9 (4.2)	0 (0.0)	2 (9.5)	
	無 回 答	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (14.3)			無 回 答	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (19.1)	
ラグビーはかっこいい	そ う 思 う	157 (72.7)	13 (72.2)	10 (47.6)	N.S. df = 2 χ^2 値 = 2.501	ラグビーはたくましい	そ う 思 う	202 (93.6)	16 (88.9)	20 (95.3)	
	どちらでもない	46 (21.3)	5 (27.8)	6 (28.6)			どちらでもない	12 (5.6)	2 (11.1)	0 (0.0)	
	そう思わない	12 (5.6)	0 (0.0)	2 (9.5)			そう思わない	1 (0.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	無 回 答	1 (0.4)	0 (0.0)	3 (14.3)			無 回 答	1 (0.4)	0 (0.0)	1 (4.7)	
ラグビーは厳しい	そ う 思 う	174 (80.6)	15 (83.3)	14 (66.7)	N.S. df = 4 χ^2 値 = 3.667	ラグビーはきつい	そ う 思 う	187 (86.6)	17 (94.4)	1 (4.7)	** P < .01 df = 2 χ^2 値 = 77.38
	どちらでもない	36 (16.7)	2 (11.1)	4 (19.1)			どちらでもない	25 (11.6)	1 (5.6)	5 (23.9)	
	そう思わない	6 (2.8)	1 (5.6)	2 (9.5)			そう思わない	4 (1.9)	0 (0.0)	13 (61.9)	
	無 回 答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.7)			無 回 答	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (9.5)	
ラグビーの醍醐味はある	は い	169 (78.3)	16 (88.9)	19 (91.6)	N.S. df = 2 χ^2 値 = 3.996	ラグビーの面白さはある	は い	141 (65.3)	10 (55.6)	14 (66.7)	N.S. df = 2 χ^2 値 = 0.318
	いいえ	46 (21.3)	2 (11.1)	1 (4.7)			いいえ	75 (34.7)	7 (38.8)	7 (33.3)	
	無回答	1 (0.4)	0 (0.0)	1 (4.7)			無回答	0 (0.0)	1 (5.6)	0 (0.0)	
トライ後のガッツポーズはない	は い	37 (17.1)	4 (22.2)	17 (81.0)	** P < .01 df = 2 χ^2 値 = 51.73	ラグビー最たる男の美学である	は い	119 (55.1)	12 (66.7)	17 (81.0)	* P < .05 df = 2 χ^2 値 = 8.891
	いいえ	179 (82.9)	14 (77.8)	2 (9.5)			いいえ	96 (44.5)	6 (33.3)	2 (9.5)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (9.5)			無回答	1 (0.4)	0 (0.0)	2 (9.5)	
ラグビーもアッパースべきだ	は い	89 (41.2)	11 (61.1)	3 (14.3)	* P < .05 df = 2 χ^2 値 = 8.611	* . . . P < 0.05 * . . . P < 0.01					
	いいえ	127 (58.8)	7 (38.9)	17 (81.0)							
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.7)							

族や種族を護ることである。したがって男は強く、たくましく、勇敢で、使命感に燃えた気迫と、正々堂々として、誠実であり、潔さが必要である。このような男らしさが“かっこいい”のである。かっこいいの“かっこ”は格好の短呼であり¹⁵⁾、ものの姿・形をいう言葉である¹⁶⁾。赤塚は“かっこよさ”は「一種の宗教的美意識であり、男の美学である」¹⁷⁾と言っている。ラグビーは己にとって宗教であると筆者も思っている。

調査の結果において、表3・表4の如く、現役選手、OB選手ともにラグビーは男らしく、かっこいいスポーツであるとのイメージを持ってプレイしている人が多いことが判った。

②ラグビーにおけるプレイの特性

冒頭に書いたように、素早いパスがバック・ラインを流れ、トライに結びつく。確かに面白く、楽しい。しかし火花を散らすような攻防があってはじめて面白く楽しいのである。その火花を散らす防御の技術がタックルである。ラグビーの数あるプレイの中で宮崎は、「これぞラグビーという魅力的なプレーをあげるとすればタックルです。」¹⁸⁾と述べ、中尾は、「ラグーマンはどこから生まれるか、それはタックルです。タックルに男の魅力を見て始める人がかなりいます。」¹⁹⁾と述べている。

調査の結果も、ラグビーの経験者はトライすることよりも、タックルに魅力を感じている人の割合が高い傾向にあった。未経験者も、経験者ほどではないがタックルに魅力を感じている人の割合が高かった。しかし、未経験者はタックルよりも、トライに魅力を感じている人の割合が高い傾向が見られた。

③ラグーマンとしての態度

柔道家である柘植は、「昔のように死力を尽くして闘い、自分が勝っても、おたがいに相手の取組精神に敬意を表する気持ちがあったらガッツポーズなんかできません。それが武道としての柔道のよいところの一つだと思うんですが、そういうものが今はなくなってしまいました。」²⁰⁾と言っ

ている。

ラグビーはそのような武士道の紳士道（礼と謙譲）と、もうひとつ *One for all, All for one* のラグビー精神があるので、トライ後のガッツポーズは取らないのだと思う。

調査の結果では、トライ後のガッツポーズを肯定している選手が多い。しかし年齢が高い選手（OB選手）は、反対に否定している割合が高い。ただし競技大会では、トライ後のガッツポーズを取る選手は殆どいない。この調査の結果により示唆されるのは、内心は喜びの感情表現をしたいのだが、ラグビー精神が無意識に働いて、淡々とした態度が取れるということではなかろうか。

④ラグビー精神とショーアップ

ラグビーフットボール競技規則の冒頭に、「ラグビーフットボールは、アマチュアの競技である。」²¹⁾とアマチュア宣言をしている。サー・ヘレン・ニューボルト^{註2)}の次のような詩は、ラグビー精神と高次元の自己目的性即ちアマチュアリズムの薫りが感じられる。

名声を超越して高き理想に、勝敗ものかは、
ゲームを愛せ、恐れなき眼差もて、
襲ひ来る敵を、打ち倒しつつも、
尚崇めよ²²⁾。

大西は「一般的にアマチュアリズムは、そのものを愛するがゆえに、それが好きだからそれをやっているのであって、他の目的のためではない。」²³⁾また「アマチュアリズムは自由な行動で、金に対しても、政治的な圧迫に対しても、名誉に対しても、そんな者には自分を売らないという考え方です。」²⁴⁾と言っている。このようなことから考えると、調査項目の「Jリーグみたいにショーアップすべきだ」についての、肯定的な考え方とは対立する。

ところで、調査結果では表3において、経験者、未経験者共に約4割の人が肯定している。しかし、肯定的な回答をした経験者はその理由として、ラグビー人口を増やすため、理解してもらうため、レベルを上げるため、やる気を出すため等であって、Jリーグのようなプロ化を前提にしたショー

アップは望んでいない。グリーンウッド^{註3)}は「観衆が何故重要かという、ラグビーの試合の一面には、それが他の者に見せるという行為が含まれているからである。また、試合に際しては、観衆がいるから適度に雰囲気盛り上がるということもあり、この点も見逃すことはできない。」²⁵⁾と言っている。この見せるという行為はラグビーの本質を理解してくれる観衆を意図したものと考えてよいのではなかろうか。約6割の否定している人の理由は、勿論アマチュアリズムの遵守である。

興味ある結果は、経験者における年齢別の比較において、30代、40代の約6割が肯定し、50代以上が約8割否定していることである。前者はラグビーの普及を、後者はラグビーの哲学を考え、共にラグビーを愛する気持ちがこのようなかたちで現れているものと考ええる。

⑤男の美学

表4によると、50代以上の選手（OB選手）は“ラグビーは男の美学の最たるものである”と思っている人が8割以上いる。そして年代が下がるにしたがってその割合も下がっている。

このようなラグビーに対する美意識の差をどう分析したらよいだろうか。美学の概念が理解できていないからか。ラグビー精神の理解や価値観の違いだろうか。

若い年代の美意識が低いと言っても、半数以上は男の美学と思っている。残りの半数の中には美意識を感じながらも、男の美学なんておこがましいと、謙虚な気持ちで否定している人もいるだろうと推測する。彼らはゲームにおいて沢山の感動や美的体験をしているはずである。そのことについては、①ラグビーの特性を表すイメージで、“カッコよさ”として答えている。しかしその差違が生活文化の時代環境の影響で、ラグビー精神の理解や価値観に相違があるとするならば、筆者の考える“男の美学意識”は、薄れてゆく運命にあるのだろうか。

おわりに

ラグビーの美意識を、ラグビーの特質（ラグビー精神）を根底にして、調査に基づき分析をし、次のことが判った。

①ラグビーの特性を表すイメージとして、現役選手、OB選手共にラグビーは男らしく、カッコいいスポーツであるとのイメージを持ってプレイしている人が多いこと、また未経験者もほぼ同じような傾向にあることが判った。

②ラグビーにおけるプレイの特性として、タックルはラグビーの醍醐味であるという質問に対して、経験者は勿論、未経験者も魅力を感じている人が多いことが解った。この結果は、冒頭にあげた“タックルはラグビーの華である”という一文を裏付けていた。

③ラグーマンとしての態度として、トライ後のガッツポーズの是非を取り上げた。その結果、ガッツポーズを肯定している選手が多いことが解った。しかし高年代のOB選手は反対に殆どの人が否定している。競技大会では殆どガッツポーズを取る選手を見かけないことから、ラグビー選手はラグビー精神を理解し、礼と謙譲の美を理解しているものと推測した。

④今後のラグビーの理想について、ショーアップの問題を取り上げた。その結果、経験者、未経験者共に約4割の人が肯定していた。約6割の経験者の否定の理由は主にアマチュアリズムの遵守であった。しかし30・40代の経験者の約6割が肯定していた。その理由はJリーグのようにプロ化を考えてのものではないと思われた。

⑤男の美学のイメージは50代以上の約8割の人が持っていた。しかし年代が下がるにしたがってその割合も下がっていた。

以上が調査結果のまとめである。

筆者の本研究における課題は、ラグビーの美意識を、

- 1) 樋口の日常的次元の価値を超えた美的価値
- 2) 山本の道の精神に流れる美意識
- 3) 袴田の生き方の美学

以上3つの観点から、ラグビー精神を根底に検証

することであった。文献並びに調査により、

1) アマチュアリズムを遵守すべきであるという気持ち根強く生きている。

2) ノーサイド精神に見ることができる。『死に至るノーサイド』^{註4)}は、その最たるものであろう。

3) タックルに代表される犠牲的精神や、*One for all* のサポート精神がプレイヤーの心の中に流れている。

以上の3点を検証した。

ラグビーが価値あるものであり続けるためには、人間が主体でなければならない。伝統の中に人間として大切なものがあることを確認した。

引用・参考文献

- 1) 上野賢一『私の趣味はラグビーです』いずみ社 1992, p. 19
- 2) 中尾亘孝『おいしいラグビーのいただきかた』徳間書店 1989, p. 184
- 3) 宮崎俊哉『ラグビーはこう見るのが楽しい』ベースボールマガジン社 1991, p. 66
- 4) 北島忠治『重量フォワードを育てて』ベースボールマガジン社 1977, p. 215
- 5) 辻野 昭『ラグビーの科学』大修館書店 1990, p. 186
- 6) 金田一京助(他)『新明解国語辞典』三省堂 1989, pp. 965~968
- 7) 吉岡健二郎『美学を学ぶ人のために』世界思想社 1991, p. 111
- 8) 袴田茂樹『神と美意識』Foresight 1994-4, p. 59
- 9) 中井正一『中井正一全集 3. 美学入門』美術出版社 1971, p. 4
- 10) 山本正男『感性の論理』理想社 1981, p. 15
- 11) 同上書 p. 106
- 12) 樋口 聡『スポーツの美学』不昧堂 1987, p. 270
- 13) 堀越 慈『ラグビーへの道』三一書房 p. 50
- 14) 八木誠一『森 重隆が明かすラグビーの魅力』CBS. ソニー出版 1983, p. 158
- 15) 前掲書 6) p. 208
- 16) 西尾 実(他)『岩波国語辞典』岩波書店 1982, p. 193
- 17) 赤塚行雄『義理と人情』祥伝社 1971, pp. 33-41
- 18) 前掲書 3) p. 66
- 19) 前掲書 2) p. 184
- 20) 柘植健司『人生と武道』『月刊武道』1994-6 日本武道館 p. 18

- 21) 日本ラグビーフットボール協会『競技規則』1993, p. 3
- 22) 大西鉄之祐『わがラグビー挑戦の半世紀』ベースボールマガジン社1984, pp. 18-1923) 大西鉄之祐『闘争の倫理』二玄社 1987, p. 109
- 24) 同上書 p. 109
- 25) ジム・グリーンウッド(江田昌佑・伊与田康雄訳)『トータルラグビー』泰流社 1980, p. 20

註

- 註1) 森 重隆は明治大学卒業後、新日鐵釜石へ入社。ラグビー連続日本一になった立役者である。1981年には監督も兼任。日本代表のキャップ数27は長く日本最多であった。
- 註2) 1862-1938 イギリスの詩人 批評家
- 註3) グリーンウッド氏は世界で名高いラグビーの名コーチであり、筑波大学に客員教授として来日したことがある。専攻は体育哲学。
- 註4) 蟹谷 勉『死に至るノーサイド』朝日新聞社 1993
1930年代後半、豪州代表ワラビーズのファイブエイスとして、2キャップを得た日系2世のラグーマンが居た。その男は1942年、豪州軍に志願し、日本軍と戦い捕虜となり、移送される途中、米国海軍の魚雷を受けて太平洋の藻屑と消えた。船が沈むまでに時間があつた。救命ボートから仲間が声を囁らして彼を叫んだが、彼は「船の中に傷ついた仲間がいる。俺はもう少し彼等のそばにいてやりたいんだ」と言い放った。